

『学農』 一九五七年十月（出版元不明、農林省関係か）

## 4Hクラブ活動の問題点とその進め方

国立教育研究所 矢口 新

### 4Hクラブというもの

4Hクラブは、原産地のアメリカのそれとは大体において、にてもつかぬものになっている。第一クラブの構成員の年令層が異なる。アメリカの場合はまだ中学校を卒業しない子供なのである。日本では二十才前後の青年である。一人前にならないがなりかけのところである。そうなっているにはそれ相当の理由がある。日本では学校の力が強くて学校にいつている子供がそういったクラブ活動に参加する余裕がない。そうして学校の教育が比較的地域の生活から離れている。中学校になると特にそうである。だから日本の子供は学校を卒業すればするほど自分の生活する地域社会などというものから遊離した考え方をもちようになる。つまり観念的になるのである。高等学校となるとはや救いようがない。

農業課程などは、そういう意味で最も地域業会と結びつきやすい性格を持っているにもかかわらず、まず大体においてそんなことにおかまいなしの教育が行われている。それとはともかく、そういう条件があるので、日本では、4Hクラブなどというものが学校の生徒の間には発達しなかつたのである。そこへもつてきて、4Hクラブ活動の日本の組織は、農林省の農業改良普及員であった。つまり農業改良の仕事と結びついて、4Hクラブの普及運動が行われたのである。その普及事業の対象は、農業自営者である。そこからおのずから対象がきまってくる。また改良普及員では学校の生徒をつかまえることは不可能でもあつたらう。学校の閉鎖性は、日本では特に強いからである。

こうして4Hクラブの構成員には、いまのような層が入ってきているのである。大体は中学校を卒業して農業をやっている人々とい

うことになる。最近では高校を卒業して4Hクラブに入る人も多くなつたが、全体としては、中学校卒業生の方が多い。

こういう成立ちをもっている4Hクラブは、またその活動においても、必然的に一定の方向をもっている。もし学校の生徒を対象にしてこの運動が普及したとして、その活動がどういふものになるかを想像したら、まるで異なつたものが考えられるのである。例えば、4Hの四つのHとは、ヘッド、ハンド、ハートにヘルスだということであるが、これが中学生を相手にして、その活動が考えられたとしたら、おそらくもつと説教くさい、場合によってはいやらしいものになつたかも知れない。現在の4Hクラブは、人によっては1Hではないかなどという人もいる。つまり農業技術だけを問題にしているということであろうが、しかしそういう具体的な生活の場で活動内容を発見してきたのは、一に発生の歴史的な事情によるのであつて、大変いいことである。観念的、抽象的なヘッドやハートやハンドが問題にされては鼻もちならないのである。農業技術の研究という具体的なものを通じて、そこでヘッドもハンドも、ハートも養われていくというふうになつていふ方が本物である。もちろんヘルスも、そういう生活の中でつくられて行つてこそよ

いのである。

#### 4 Hクラブの問題点

しかし4 Hクラブに現在問題はないかという点と大ありである。それもまた、発生の歴史的事情から必然的に生れてきたことである。

第一に4 Hクラブは、あまりに農業改良事業的である。つまり技術普及の面にとらわれすぎてゐる。技術普及というのも本格的に考えれば、人間の問題を忘れてはならぬはずであるが、それにとらわれすぎると、ただ形だけの普及におちいりがちである。そうなるという一種の流行をつくることになる。

理由はよくわからないが、普及員がこれがいいというからやってみようという程度で、新しい作物がとり入れられる。プロジェクトはそういう新しいものの試作という形でおこなわれる。これはもうかるそうだというのでやる。それは普及員がいうからである。普及の形だけからいうなら、それで結構普及したことになる。どこの地域ではどういふものが普及したということになる。それは決して悪いことではない。しかしそのことを通じて人間が利口になつてゐることが大切である。こ利口でなく本当に考えることが出来るようになってゐることが必要である。プロ

ジェクトを通じて考える農民をつくる、考える農民になるということが4 Hクラブのねらいであつたはずである。そうなるには、まだまだ考えることがありそうである。

私はかつてあるクラブについて出荷組合型の4 Hクラブなどということをつたつたことがある。それは非常に具体的な活動をするクラブであつた。みんなプロジェクトとして或る野菜をつくり、それを共同出荷してチヤンともうけたのである。それまでするには全く涙ぐましい努力があつた。これは大変結構なことである。そういう具体的な活動を通じて、確かにいろいろ考える農民が出て来るであらう。

しかし、この場合、もうからなかつたら、クラブはどうなつたか。恐らくつぶれたであらうといわれている。そこが問題である。事実損をしてそのために解散したクラブもあつた。しかし損をしたことが、クラブ員を賢明にするのに役立つていないかどうか。りつぱに役立つてゐるのである。だからそのために、クラブが解散するなどというのはおかしなことなのである。損をするのは経営上決して望ましくないが、人間の成長という点ではそういうこともまた薬である。それ位の中のある考え方がほしいものである。それだけでなく4 Hクラブとしての発展は望めないであらう。

あろう。

まだその他にもいろいろなタイプがある。研究発表会型などと名づけたものもある。これはまた研究発表に賞をもらうことをねらつてゐるものである。賞をもらうほどだからよい研究であるにちがいないが、それが目的となつて、自分の生活を忘れて、或いはうまく恰好をつけるといふ研究になつたら、また考える農民ではない。農民とは生活する人とのことで、ただ研究だけをしたり、生活を忘れて考えの遊戯にふけてゐる人のことではないはずである。

生活しながら考える、などということは大変なことである。それは生活の中で哲学することなのである。なかなかおいそれとはいかないことは当然である。そこで仲間を考えるのである。若い仲間がそういうことを積みあげていくうちに、だんだんと人生も見えてくる。そういうクラブでなくてはならない。

#### 考える農民はただのお題目でない

私は最近三重県の名張市に行つて、高北式のスキをつくつてゐる工場をみた。高北式のスキのことを知っている人が多いと思うが、その工場を知らない人は多いであらう。この会社の社長という人はもう八十にもなつてゐる人であるが、大正のはじめからスキをつ

くりはじめて、半世紀にもなる間スキをつくっている人だそうである。農民の土を耕す労苦を半減したいというのが一念発起のもとだそうである。その工場の倉庫には、その半世紀の間に実験的に製作した何百本というスキがならべられてある。いずれも力学的な研究の過程において生み出されたものである。それをみていると、何かすさまじい意欲のようなものにふれるのである。たった一つのスキも、そういう何百という段階を経て今日の姿に到達しているのである。そこには考える農民の象徴を感じたのである。

考える農民とはただのお題目ではあるまい。本当に考えるとなったら大変な努力がいるのである。ただ普及員に聞いてプロジェクトをやっているだけでは考えたことにはなかなかならないのではないか。日本のスキの形も、何百という段階を経てきているというような深い考え方をしなくては、本当に考えたことにならない。ということは、考えたことから新しい生活を生み出すことにならないということである。プロジェクトがマンネリズムになってしまつては、かえって考えざる農民になるのである。考えるとは、惰性の魔力からのがれるということである。

プロジェクトの傾向を見ると、何か一つの作物の栽培をするというのが多いけれども、

もっと幅を広げてみる必要があるはしないか。或はもっと深めてみる必要があるはしないか。作物や家畜の育成にしても、こうしてこうしてこうやれば育つ、という一般的方式よりもっと深いところに、自然の真理や、社会の真実がありはしないか、そういうものにふれることが本当に考えるということであろう。

(国立教育研究所)